音沢から下立にかけての飛騨（宇奈月）変成岩類

黒部川河川敷に見られる変成岩

音沢地区内の黒部川河川敷では、黒と白の縞模様の礫を見ることができます。これは、泥岩と石灰岩が高温高圧下で変成作用を受けてできた宇奈月変成岩類と呼ばれものです。縞模様が美しいためか、庭石としても珍重されていました。

宇奈月変成岩は、今から５～４億年前のカンブリア紀からシルル紀にかけての堆積物が、高温高圧下で変成作用を受けたものです。白の晶質石灰岩の部分は炭酸カルシウムで、塩酸をかけると数億年前に貝やサンゴ虫などが固定した当時の大気中の二酸化炭素がでてきます。

宇奈月変成岩

また、下流の下立地区内では、サンゴや貝類などが堆積してできた石灰岩が高温高圧により大理石に変化し、縞模様のある貴重な石材（オニックス）として昭和初期まで商品化されていました。１９３６年に竣工した現在の国会議事堂には、今では産出しなくなった下立（おりたて）産の大理石が衆参両議院正面玄関の柱や階段の床材、手すりなどに使われています。

国会議事堂は、正に日本産石材の博物館である。国会議事堂は1886年にその計画が発表されてから、1936年11月に竣工するまで、50年の歳月を要した。国会議事堂の高さは65.45mであり、竣工当時日本一の高さを誇っていた。国会議事堂は、鉄筋コンクリート造りであるが、その外装には御影石が内装には大理石が使用されている。国会議事堂

正面玄関全景

エレベーターホール壁材のオニックス

の建設にあたっては、 国内産の大理石を使用することを基本方針とし、1910年から1912年にかけて地質学者であった脇水鉄五郎氏と小山一郎氏により石材の調査が行われ、1920年以降には精査が行われた。最終的に外装用石材としては、山口県黒髪（蛙）島産と広島県倉橋島産尾立石（花崗岩）が採用された。中庭通路には新潟県産草水みかげも使用されている。内装用である大理石としては37種類が採用されたが、大理石といっても岩石的には狭義の大理石が33種類、蛇紋岩が２種類、さんご石灰岩が１種類、カンラン岩が１種類および日華石（火山礫凝灰岩）が１種類といった内訳からなる。「黄龍」と呼称される韓国産の大理石を除き他の全ての石材は国産である。（「新国会議事堂の石」より）

柱の表面に貼られたもの

階段の手すりに
使われたもの

手すり部分を拡大したもの

※国会議事堂内の映像は参議院事務局より資料提供を受けました。

写真では、黄色で縞模様のある石材が下立産のオニックスです。